

薩藩農村人口の動態的研究 (第2報)

資料篇 2

羽 生 純 夫

Sumio, HABU.

2. 川 辺

I 引 用 記 録 記録番号

1. 享保6 (1721) 宗門手札帖(殘簡) 20
2. 享保9 (1724) 両添村竿次帖 21
3. 明治3 (1870) 平山村人員証計帖 22
4. 明治5 (1872) 野崎村人員証計帖 23

すべて、川辺町立図書館所蔵である。別に、
明暦4 (1658) の竿次帖がある由であるが未見。

II 統 計 資 料

第2表 性 比 (人口100中男)

年 次	性 比 (90%信頼限界)
1658	55.9 (50.0~62.5)
1721	59.1 (51.7~66.7)
1724	56.3 (50.5~61.8)
1753	53.9 (50.2~57.6)
1870	52.0 (48.9~56.3)
1872	45.4 (41.7~49.1)
1658~1753	54.5 (51.4~57.5)

註 1658の性比は明暦4, 竿次帖(川辺町郷土誌より引用)

III 動 態 大 要

1. 人 口 の 推 移

a. 川辺郷郷土累年比較表(男子)

元 祿	16	(1703)	465
宝 歴	3	(1753)	706

第1表 年令階級別人口百分比

年令階級	西 歴	1721	1724	1721~1724	1870	1872
1 ~ 5		10.2	14.2	12.8	8.4	12.9
6 ~ 10		9.5	7.9	8.4	5.5	9.6
11 ~ 15		10.2	10.9	10.7	9.5	8.4
16 ~ 20		8.0	9.9	9.3	10.4	9.5
21 ~ 25		12.4	7.3	8.9	10.3	11.1
26 ~ 30		7.3	7.0	7.1	5.6	8.7
31 ~ 35		5.1	6.0	5.7	8.2	4.3
36 ~ 40		6.6	6.6	6.6	5.5	5.0
41 ~ 45		5.1	5.3	5.2	7.1	4.1
46 ~ 50		5.8	5.6	5.7	8.0	7.5
51 ~ 55		6.6	1.7	3.2	6.0	5.0
56 ~ 60		4.4	4.6	4.6	3.8	5.0
61 ~ 65		1.5	4.0	3.2	3.5	2.3
66 ~ 70		1.5	3.6	3.0	2.4	2.7
71 ~		5.8	5.3	5.5	4.9	3.9
総 数		137 (220)	302 (303)	439	549	560

註1. 明治3年, 及び, 5年の分は一部の採録である。前者は士族だけ, 後者は農民だけで, 社会階級間の相違の有無を検する目的であげた。

註2 総数括弧内は記録末尾に示す総数。

第3表 年令階級別有配偶率(女)

年令階級	1721~1724	1870	1872
16 ~ 20	18.7	9.1	9.7
21 ~ 25	57.9	33.3	58.1
26 ~ 30	93.3	61.9	90.0
31 ~ 35	83.3	63.6	100.0
36 ~ 40	84.6	92.3	64.3
41 ~ 45	88.9	72.7	73.3
46 ~ 50	70.0	65.2	69.2
51 ~ 60	73.3	56.0	57.7
61 ~ 70	72.7	47.1	33.3
71 ~	11.1	5.9	35.7
16 ~ 50	68.1	54.4	59.9
51 ~	57.1	37.3	45.5
有配偶総数	84	102	116

文 化	12	(1815)	847
文 政	1	(1818)	871
嘉 永	4	(1851)	929
b. 川 辺 郷 人 口 総 数			
天 明	7	(1787)	9117
文 化	9	(1812)	9218
文 政	1	(1818)	10018
文 政	10	(1827)	9714
天 保	5	(1834)	9570
慶 応	1	(1865)	9761
明 治	5	(1872)	11447 註

以上を通覧して、18世紀前半には急激な人口増加があつたことが想像される。19世紀前半は完全に一進一退の状況である。18世紀後半はその移行期をなすものであろう。慶応から明治にかけての増加は注目されるべきである。

註 本表は川辺町郷土誌から作製。

2. 年 令 構 成

年次 階級	1721	1724	1721~1724	1870	1872
1 ~ 20	37.9 (30.7~45.2)	43.0 (37.5~48.7)	41.5 (36.7~46.4)	33.7 (29.5~38.3)	40.4 (36.9~44.4)
21 ~ 40	31.4 (25.1~38.9)	26.8 (22.8~32.1)	28.2 (24.5~31.8)	30.6 (27.0~35.0)	29.1 (25.7~32.9)
41 ~ 60	21.9 (16.6~29.0)	17.2 (14.0~21.3)	18.7 (16.0~22.1)	24.9 (21.9~28.3)	21.6 (18.9~24.8)
61 ~	8.8 (5.7~14.0)	12.9 (10.1~15.6)	11.6 (9.6~14.6)	10.7 (8.8~13.3)	8.9 (7.2~11.2)

年次 階次	1721	1724	1721~1724	1870	1872
1 ~ 40	69.3 (62.4~75.9)	69.9 (65.6~74.6)	69.7 (65.2~72.6)	64.3 (59.4~67.5)	69.5 (65.1~73.4)
41 ~	30.7	30.1	30.3	35.7	30.5

1721~1724と1872の驚くべき一致と、1870(士族)の著しい老令化が注目される。

更に、性別に検討すると次の結果を得る。

年次 階級	1721~1724		1870		1872	
	男	女	男	女	男	女
1 ~ 20	42.6	39.9	37.7	29.2	37.8	42.5
21 ~ 40	25.9	31.4	30.4	30.8	33.1	25.8
41 ~ 60	19.1	18.1	23.2	26.9	20.9	22.2
61 ~	12.4	10.6	8.7	13.1	8.3	9.5
1 ~ 40	68.5	71.3	68.2	60.0	70.9	68.3
41 ~	31.5	28.7	31.8	40.0	29.1	31.7

1721~1724 及び 1872 と 1870 との性別人口構成の差は、信頼度を無視すれば 1870 で女の老令化が目立っている。

3. 年齢階級別性比

性比の年齢階級別構成は次の通りである。

年齢階級 \ 年次	1721~1724	1870	1872
1 ~ 20	58.8 (51.6~64.5)	58.9 (52.0~64.8)	42.5 (37.0~48.2)
21 ~ 40	52.4 (44.7~60.0)	52.4 (45.1~59.3)	52.7 (45.4~59.9)
41 ~ 60	58.5 (48.5~67.0)	51.1 (41.7~56.2)	43.8 (36.0~51.6)
61 ~	60.7 (49.2~71.4)	42.4 (32.3~53.3)	42.0 (33.3~53.8)
1 ~ 40	56.2 (51.3~61.0)	55.8 (50.8~60.6)	46.3 (41.4~51.3)
41 ~	59.4 (52.1~66.9)	46.9 (41.2~52.7)	43.3 (37.2~50.0)

以上の結果を要約すれば、

20才階級別では

1721~1724 で 61~ の性比が非常に高いこと。

1872 で 1~20 の性比が低いこと。

40才階級別では

1721~1724 で年齢階級の上昇とともに性差が開いていること。

1870, 1872 で性差は縮まり、特に 1870 では逆になつていること、

等である。

このことは、1870 及び 1872 では女が男に比べて、延命上何か有利な事情になつたことを示すものではないかと思われる。特に 1870 の性別年齢構成に於いて、女の老令化が目立っていた点を思い合わせると、その感を深くする。

また、1872 に 1~20 の男の占める割合の少ないことは、この地方に著しい出稼ぎが既にその頃も多かつたためではないかと思う。これは、性別の年齢構成で、女に比べて、この階級の男の占める割合の低いことからもうかゞわれる。しかし、逆に、21~40 の男が入つて来たと考えられないこともないが、人口過剰の地帯であるから、さきの考え方が妥当であろう。

4. 配偶関係

配偶関係については、第3表（女）に示す通りであるが、更に、之を整理して次の表を得た。

年齢階級 \ 年次	1721~1724	1870	1872
16 ~ 50	68.1 (59.9~75.6)	54.4 (47.1~61.8)	60.3 (54.2~66.0)
16~30	54.0 (42.4~65.2)	34.3 (24.9~51.0)	47.6 (38.5~57.3)
31~50	84.0 (72.4~90.9)	71.3 (62.0~78.7)	75.4 (65.0~82.7)

例が少ないために、有意性は認められないが、1870 郷土階級の配偶率は少い。このことは既に年齢別人口構成からも予想せられるところである。人口構成をほぼ等しくした、1721~1724 と 1872 でも配偶率は可成りちがうように思われる。

註. 1721~1724 及び 1870 の年令構成は、山崎の1690~1761に非常によく似ている。然し、配偶関係に至つては、1870は山崎の1832~1859に似ている。之の点も、時代的、地域的相違を考へる必要があると思はれる。

4. 生子率及び死人率 (右表参照)

1787は天明期に当り、死人率は高い。山崎郷の1772~1786の平均生子率及び死人率が、それぞれ22.0, 17.1であつたことをあわせ考へると、頗る興味深いものがある。

年 次	生子率	死人率	平均人口
1721	19.8	—	220(小野村)
〃	20.1	—	910(小野, 高田村合計?)
1746~1753	21.7	—	645(衆中一番与)
1787	24.3	16.3	9140(全郷)

3. 蒲 生

I 引用記録 記録番号

1. 延享2 (1745) 漆村 竿次帖 24
2. 〃 上久徳村知行名寄 25
3. 安永2 (1773) 漆村 竿次帖 26
4. 文政9 (1826) 知行 高名寄帖 27
5. 嘉永6 (1848) 人口調(仮称) 28
6. 慶応4 (1863) 白男村 竿次帖 29
7. 〃 白男村 名寄帖 30

註 嘉永6年の分は蒲生郷土誌から引用した。その他は総べて、蒲生町図書館所蔵の記録による。

II 統計資料 (第1, 2, 3表参照)

III 動態大要

1. 人口の推移

a) 蒲 生 郷

寛 永 13 (1636)	3486
嘉 永 6 (1853)	4524

b) 漆 村

享 保 2 (1745)	141
安 永 2 (1773)	154
嘉 永 6 (1853)	197

資料は少ないが、人口増加が極めて緩慢であつて、可成り早い時期から停滞人口の形をとつたと思われる。これは、後で示す年令構成及び配偶関係からも容易に想像される。

第1表 年令階級別人口百分比

年令階級	年次	1745	1773	1826	1865
1 ~ 5		8.2	7.7	4.5	7.1
6 ~ 10		9.2	6.3	6.1	7.5
11 ~ 15		8.7	12.6	8.3	7.5
16 ~ 20		7.2	4.2	11.4	9.9
21 ~ 25		11.8	11.9	7.6	11.5
26 ~ 30		7.7	6.3	6.1	5.9
31 ~ 35		4.1	4.9	7.6	7.1
36 ~ 40		4.6	9.8	7.6	4.4
41 ~ 45		9.2	5.6	7.6	5.1
46 ~ 50		6.2	8.4	9.1	4.7
51 ~ 55		7.2	4.9	6.8	5.1
56 ~ 60		3.6	2.1	1.5	7.1
61 ~ 65		4.1	4.2	4.5	7.1
66 ~ 70		4.6	2.1	3.8	4.7
71 ~		3.6	9.1	7.6	4.0
総 数		195	143	132	253

第2表 性比の推移 (人口100中男)

年 次	性比	郷 村
1636	58.6 (56.7~61.3)	蒲 生 郷
1745	56.8 (49.8~63.4)	漆村, 白男村
1773	57.1 (50.3~64.4)	漆 村
1826	57.6 (50.2~65.2)	?
1853	53.7 (51.5~55.6)	蒲 生 郷
〃	49.7 (43.9~56.1)	漆 村
1868	50.6 (45.0~56.3)	白 男 村

第3表 年令階級別有配偶率 (女)

年令階級	年次	1745~1773	1826	1868
16 ~ 20		11.1	14.0	50.0
21 ~ 25		53.8	0	76.9
26 ~ 30		50.0	50.0	60.0
31 ~ 35		72.7	66.7	77.7
36 ~ 40		87.5	60.0	60.0
41 ~ 45		90.9	66.7	60.0
46 ~ 50		90.9	83.3	50.0
51 ~ 60		58.4	80.0	70.6
61 ~ 70		44.4	60.0	35.7
71 ~		66.7	66.7	0
配 偶 数		64	23	55

なお、漆村の1745~1773に於ける各門の人員の増減もこのことを示している。

門番号	年次	1745	1773	門番号	年次	1745	1773	門番号	年次	1745	1773
1		3	4	11		8	6	21		7	6
2		7	4	12		4	8	22		2	3
3		7	9	13		6	6	23		5	6
4		4	3	14		4	8	24		4	2
5		7	4	15		6	8	25		5	9
6		9	5	16		4	3				
7		5	6	17		6	5				
8		7	6	18		7	7	計		141	154
9		3	7	19		8	8				
10		6	6	20		7	8				

註 門名は省略して、番号でかえた。

2. 年令構成

年令階級	年次	1745	1773	1826	1868	1745~1868
1 ~ 20		33.3	30.8	30.3	32.0	32.3 (29.7~35.2)
21 ~ 40		28.2	32.9	28.8	29.9	29.0 (27.1~32.3)
41 ~ 60		26.2	21.0	25.0	22.2	23.9 (21.2~27.6)
61 ~		12.3	15.4	15.9	15.9	14.8 (12.9~17.4)
1 ~ 40		61.5	63.7	59.1	61.9	61.3 (57.8~64.6)
41 ~		38.5	36.3	40.9	38.1	38.7

各年次にも老令化の傾向が強く、その間に殆んど差がない。早くから停滞人口に入つたことを示している。註

更に、性別に如何なる変化をなしたかを見なければならぬ。蒲生では、第2表に示す通り、1826~1853の間に性比の断層があるように思われるから、1745~1826と1846を比較すると次の結果が得られる。

年令階級	年次	1745~1826		1868	
		男	女	男	女
1 ~ 40		59.2 (52.8~65.0)	66.6 (59.6~72.5)	62.9 (52.3~65.9)	59.7 (51.0~69.4)
41 ~		40.8	33.4	37.1	40.3

即ち、有意性はないか男の若年化と女の老令化が見られそうである。これが何を意味するかは更に性比の検討を要する。

註. 山崎の同期は1~40は65.1で、それに比ぶれば極端な老令化といえる。

3. 年令階級別性比

さきに述べた通り、1826~1853の間に断層を

年令階級	年次	1745~1826	1868
1 ~ 20		51.0 (44.7~58.2)	51.9 (43.1~61.0)
21 ~ 40		57.9 (50.5~65.0)	56.2 (45.7~65.4)
41 ~ 60		57.9 (50.2~65.5)	45.0 (34.4~55.8)
61 ~		70.1 (60.8~77.8)	47.5 (35.1~60.0)
1 ~ 40		54.3 (48.5~59.9)	53.9 (46.5~61.2)
41 ~		60.4 (54.3~67.0)	46.0 (37.6~54.0)
性比		57.7 (54.0~62.4)	50.8 (45.0~57.1)

認めるから、その前後を年令階級別に比較すると、上記の結果を得る。

明らかに、41～で有意の差をしめし、しかも、1～40では殆んど等しい。このことは、後者で41～の男が転出したか、男が女に比べて余計死亡したか（語を換ゆれば、女が延命上有利になつてゐることである）何れかでなければならぬ。前項で女の老令化が見られたが、1～40で性比が略々等しいことは、れそが1～40の女の他所出（出稼その他）によるものでないことを示している。結局1863の性比の接近は、条件は別として女の延命上の有利に基くと判断すべきであろう。

また、1745～1826では年令階級が上るにしたがつて性比が開いてゆくに反し、1863では逆に縮まつてゆくことも、之を間接に証明するものと云えよう。註

註 このことは、山崎、川辺においても見られた。しかし、山崎や川辺の場合とちがつて、こゝでは、初めから老令化している。年令構成の老令化と、女の延命上の有利化とは一応、切り離して考うべきことを示すものゝように思はれる。

4. 配 偶 関 係 (女)

例数は少いが、年令階級別には次の通りである。

年令階級 \ 年次	1745～1773	1826	1868
16 ~ 50	65.3 (55.3～73.5)	45.2 (31.2～60.0)	63.3 (52.7～72.6)
16～30	41.2	14.3	63.3
31～50	85.4	70.6	63.3

配偶関係が可成り早期から悪化してゐたらしいことは統計的有意性はないが、他の郷、村と比較して想像できる。

5. 出 生, 死 亡

出生、死亡、及び人口移動についての資料は見出すことはできなかつた。

